

DMAT 第 1 班活動記

— 出動準備の不備から得た教訓 —

長岡赤十字病院 ICU 大川 玲子

～～～自己完結であるが故の準備の必要性を感じた～～～

今回の災害の大きさを感じつつ、福島へ向かった。その後、日赤救護班として新地町にて救護活動を行ったが、原発事故により撤収となり、宮城県へと向かった。自身を守るためとはいえ数時間で撤収せざるを得なかったことがいつまでも重く押し掛かった。災害派遣に伴う出動では、準備をしっかりと行うことの重要性を感じた。

病院からの出動の指示を受け、私たち DMAT 1 班は 3 月 11 日 16:30 に病院を出発した。私はそれまで DMAT として 2 回出動した経験があったが、いずれの災害も人的な被害状況はさほど大きくないと予想しながらの出動であった。

しかし今回だけは、津波にのまれる建物や車の映像、出動中のラジオからの情報を聞くにつれ、自身の身の危険も感じ、背筋の凍る思いと、強い緊張感に包まれていた。

車を走らせながら、DMAT 本部より福島県立医大・仙台医療センターが参集拠点との連絡があり、福島県立医大へ向かう。通行止めの影響があり、福島県立医大に到着したのは 22:30 であった。既に DMAT 隊が 5 チーム程先着しており、統括 DMAT の指示で、携帯電話で近隣の病院へ被害状況確認の連絡・情報収集や EMIS 代行入力を行った。近隣の南相馬市立病院が、ライフライン使用不可、病院の倒壊があり、患者受け入れ困難であるという被害報告を受け、当チームは病院支援へ向かう。

病院では、入り口ホールに寝具や治療のための物品を準備し待機していたが、患者搬入は少なく閑散としていた。当チームは、57 歳の女性（右上腕骨骨折・血気胸・左下腿打撲）を福島県立医大へ救急搬送するため、医師 1 名・看護師 1 名・ロジ 2 名で任務にあたった。他の私を含めた 3 名は、病院支援と情報収集のため、病院に残った。その間病院の厚意で休憩室で横になったが、休んでいる間にも頻繁に余震が起き、TV

からは緊急地震速報が流れ、携帯のエリアメールのサイレンで休める状況ではなかった。（隣で休んでいた研修医 S 先生は寝息を立てていたが、さすが若さがなせる技だ。）

新潟でも地震が起きたという情報があり、家族は無事か不安で、すぐにでも帰りたい気持ちに襲われた。眠れない夜を過ごし、12 日の朝には一旦福島県立医大に引き上げた。

新潟県支部と連絡をとったところ、新地町に愛知県救護班が dERU を展開するため、合流して日赤災対本部立ち上げをするように要請があった。DMAT としての需要は少ないと判断し、救護班活動に切り替え、医療センター・横浜みなどのチームと共に新地町へ向かった。TV で電車が「く」の字に折れ曲がり脱線している映像が頻繁に流れたあの町である。新地町は、津波被害により町の半分以上が壊滅状態であり、避難所 10 か所に 1,580 名が避難していた。

はるか遠くに見える海まで見渡す限りの泥地に流された車や瓦礫が点在し、400 名以上の行方不明者と死亡者の捜索に追われていた。私たちは役場内に救護所を設置し、他病院救護班と共に避難所の巡回診療を開始した。長岡チームは 2 か所の避難所で約 400 名を巡回、外傷 2 名、不眠・慢性疾患・妊婦など 38 名の診療を行った。

しかし福島原発が爆発し、福島県支部・新潟県支部の指示により 18:30 急遽救護所撤収となった。私たちは「また明日きますね」と言葉をかけながら巡回診療を行っ

ていたというのに、自身を守るためとはいえ数時間で撤収せざるを得なかったことがいつまでも重く押し掛かった。

帰院してからも、逃げ帰ってしまった罪悪感に苛まれ、もう一度福島に救護活動に行きたいと思っていたが、後には出動のチャンスはなく、適わぬ思いで終わったことが今でも心残りである。町の人々はどうなってしまうのか?と心配しながら現場を後にし、指示に従って宮城県白石市役所へ向かった。20:00 市役所へ到着し、おにぎりとおカップラーメンをいただいた。私たちは食料を少ししか持参せず、この日もほとんど食べておらず、一日中トイレにも行っていないことに気付いた。翌日の食事も愛知チームから恵んでいただき、言葉で表せない程の感謝の気持ちであった。準備不足が最大の反省点であった。休息するための毛布や寝袋も持参しておらず、この夜は狭い車内で極寒の中、車の暖房をつけ、着込んで縮こまりながら休息した。(他のメンバーによると、大川は特等席を陣取り、この日はさすがに熟睡していたらしい。)

翌 13 日は、地域の保健師と共に、白石中学校 300 名、白石第二小学校 280 名の巡回診療実施とこころのケアを実施。外傷 1 名、不眠・発熱など内科的疾患 2 名の診療を行い、昼には救護活動を終了し真夜中 0:30 に帰院した。

今回の出動は今までの DMAT 出動の中で最も長く、精神的にも肉体的にも辛い 3 日間であった。その原因のひとつには、不十分な食事や休息にもあったと振り返る。災害現場で食事や休息を十分に取ることは難しいが、少しでも生理的ニードを充足するように努めることが大切だ。空腹は疲労を増大させ、睡眠不足は精神的安定を阻害する。

災害派遣の出動準備に関しては、行く道中で、あるいは行った先で何とかなるといふ発想は通じない。初動班はどうしても出動準備時間が短く、食料や休息のための準備も後回しに考えがちであるが、自己完結と言う以上は準備をもっと真剣に考えなくてはいけないと感じた。